

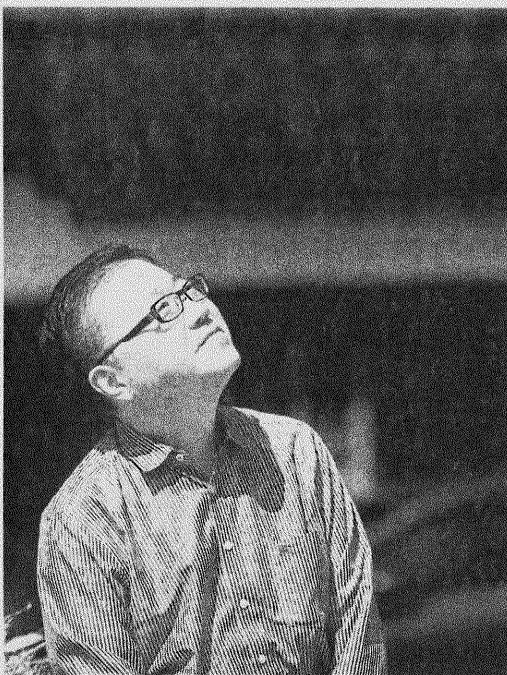
医師と患者・家族のコミュニケーションについて、今回も考えてみたいと思います。昔は病状や治療内容について記した説明用紙は手書きで、後から読み返すと何が書いてあるか分からないようなものがまかり通っていました。今は、あらかじめきちんと細かく内容が書かれたものが用意されており、その一部に「()」が入っていて、患者の状態に応じてカッコの中を埋めて使う形になっています。

信頼関係 高める場を

医師と患者・家族の関係

西村 元一
金沢赤十字病院副院長

ドクター元ちゃん
がんになる



一望月亮一撮影

例えば手術の承諾書で「手術における合併症でこういう可能性は〇%、この可能性は△%、そして死亡率は〇・〇〇1%」

「書く必要がありませんが、本当にそれを見た患者の人は安心して手術を受けられるのですか。書いてあるからいい」

「書いていないから悪い」ではなく、患者のことを考えて書いているかが重要だと思います。

「そうであれば、患者一人一人に応じて説明用紙を作成すればいいのではないか」ということになりませんが、実際は時間的にも労力的にも難しいと考えられます。では、どうすればいいのでしょうか。

「そうであれば、患者一人一人に応じて説明用紙を作成すればいいのではないか」ということになりませんが、実際は時間的にも労力的にも難しいと考えられます。では、どうすればいいのでしょうか。

昔は医師と患者・家族の信頼関係が、もう少し深かったからこそ手書きの説明用紙でも良かったのだと思います。恐らく信頼関係が基礎にあり、患者の皆さんから自然と「おまかせします」という言葉が出ていたのでしょう。医師と患者とのコミュニケーションが完全だったかどうかは分かりませんが、今よりは両者が信頼関係で結ばれていたのではないかと思います。

今は、「訴訟」ということが出てきたため、両者の関係が非常にヒリヒリとした雰囲気になりがちです。何かがあった時に備えて、医療者側も防御態勢に入り、書類がどんどん増えていきます。私も患者になって多くの書類を渡されたことが、かえって医療者と患者を遠ざけているような気がします。

にしむら・げんいち 1958年金沢市生まれ。83年金沢大医学部卒。金沢大病院などを経て、2008年金沢赤十字病院第一外科部長、09年から現職を兼務。13年から、がん患者や医療者が集うグループ「がんとむきあう会」代表。

「前回紹介した、妻の病気の説明を受けたものの「医師の話は専門的な言葉ばかりで内容がよく分かりません。医師は忙しいので、そんなところで質問をするなんて絶対に無理です」と私の講演会で話した男性に、私は「患者や家族の皆さんが、分からないことは分からないと医師にきちんと伝えないと何も変わりませんよ」と答えました。もっと医師と患者がお互いの立場や気持ちを知ることが出来る機会や場所が必要なのではないでしょうか。